

白山ふるさと文学賞

第八回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

小学生3・4年の部 最優秀賞

10年たつても大好きな母

松陽小学校四年

西海さいかい

夕日ゆか

私にはとてもやさしいお母さんがいます。

もう私を育て10年ですが1回も私をきずつけたことがない、自まんのお母さんです。

ある日、私はお母さんに

「私をうんだとき何時間くらいで、私が生まれたときに、どんな気持ちだったの?」

とききました。すると、家事をがんばってくれているお母さんが笑顔で答えました。

「夜の11時くらいから11時間かけてゆかを生んだのよ。あなたが生まれたとき本当にかわかったのよ。」

そう答えるとたくさんの大きな本をもってきました。

「お母さん、この本なに?」

「これはゆかの小さいころのアルバムよ。」

おっと。私はおどろきました。かぞえると、とってもたくさんあって、どれも小さくて少し可愛い私のがたがうつる写真ばかりでした。プールでうきわにうかんでいる私とそれを笑顔で見守るお母さん。つくえの上でこのロウソクがささったケーキがあり、それをみて笑顔でピースする小さい私とその後ろにほほえんでいるお母さん、どれもこれもなつかしい写真でどこか心があったまるような気がしました。

そして、私が小学校に入学したときに少し男の子にかかわれたりして、あのときはまだ1年生なので先生と話す勇気がありませんでした。

なので、いつも何かいやなことがあったら、いつもお母さんに相談していました。

「お母さん。今日〇〇くんがいやな事いわれたよ。」

私は悲しい顔でいうとお母さんがほほえんで答えました。

「だいじょうぶ。気にしないで、いつでもお母さんがそばにいるからね。」

すぐくたよりになって元気が出る回答だと思いました。そのあとに私がこわいゆめを見て、お母さんに少しもうしわけない気持ちで、

「お母さんこわいゆめを見たよ。」

そういうとお母さんはすぐとなりにある私の手をつないでこう言いました。

「だいじょうぶ。もし何が出てきてもお母さんがやつつけてあげるからね。」

お母さんが言いおわった後頭をなでて、私はゆっくりねむりました。私はとてもうれしくなってこわいゆめのことなんかわすれてしまいました。この時これほどいいお母さんはいないだろうと思うと、とても幸せな気持ちになりました。

夜が明けて朝になりました。今日は土曜日なので、お母さんは休みです。

「じゃあお母さん!!ホットケーキを作ろう!!。」

そうすると私はざいりようを用意して作りはじめていました。私がかまごのからをわるときに失敗して、からをきじのもとに落としてしまいました。そのときにお母さんがすぐかけつけお手本をみせてくれました。

「こうやってからをちゃんと持つて。」

カラツ：ちゃんとわれました。あとは火を使うことだけです。

「あとはまかせなさい。やけどしちやたいへんだから。」

そう言うって、私とはくらべものにならないくらいに火使いをしました。

私は、私のことを一番に考えてくれていて、とてもいいお母さんだと思いました。

そんないい事がつづく中、ある日けんかがおきてしまいました。

「今日はこの漢字の〇番から□番を1時間でしてね。」

いつもより多いし、ちょうどつかれていたの、

「これは多すぎるよ。」

と、少しもんくを言ってしまった。

「分かったよ。」

そうお母さんがいうと私が

「なんかテキトーにいつてない。」
と、大へんな事を言ってしまった。その時私はなにも考えていなかったのです。

「やればできるでしょ。」

「できないからいつてんの!!。」

2人の声は大きくなり、けんかが始まってしまいました。しばらくたっておさまりましたが、よく考えてみると、ねこカフェに遊園地など私が行きたいところに連れていつてくれたり、ひまさえあれば、私とお話してくれるはずぐすてきなお母さんに「テキトー」だなんて、なんてことを言ったのか、悲しくて仕方がありませんでした。ゆっくりなみだをぬぐって泣いていた私をお母さんがはげましてくれました。私はあんなにひどいことを言ったにはげましてくれるなんて少しだけ信じられなかったです。

このように、私の小さいころからこんなに大きくなるまで育ててくれてとてもすてきなお母さんだと思いました。けんかもあるけどすぐに仲直りしてくれるお母さんが好きです。

